

文部科学省「大学教育充実のための戦略的大学連携支援事業」

「アカデミア・コンソーシアムふくしま」の構築による  
広域連携型学士力向上プログラム

# ふくしまの留学生と 国際交流 2011

International Students of Fukushima Prefecture and International Exchanges

アカデミア・コンソーシアムふくしま







## 東日本国際大学

お名前 エヴァン・セティオン

出身国 オーストラリア

(所属校) HIGASHI NIPPON  
KOKUSAI UNIVERSITY

(お名前) EVAN SETIOSO



"When you're in Rome, do as the Romans do."  
Speak in Roman  
Follow Roman Laws and Rules  
Think, Laugh, Play like Romans  
In particular, Romans are people like us, they are not aliens.

(日本語訳) .....

「ローマにいる時は、ローマの人のようにしなさい」(郷に入っては郷に従え)と言います。ローマ語を話し、ルールや法律に従い、ローマ人のように遊んだり、笑ったり、考えたりしなさいという意味です。

ローマの人達も私達と同じ人間ですから、心配はいりません。

## 福島大学

お名前 シルビア

出身国 インドネシア

(所属校) Universitas  
Fukushima

(お名前) Selvia



Jangan pernah takut untuk mencoba sesuatu yang baru.

(日本語訳) .....

何か新しいことにいつもチャレンジしてください。

## 会津大学

お名前 カニオ・ゲオルギエフ・デシト

出身国 ブルガリア

(所属校) Университет на Агуз

(お名前) Кано Георгиев



Хората в Агуз са  
сери и безпечни!  
Тук не мога да се  
намеря и нещо от  
приятелите! Напротив,  
те живеят още! Но аз  
и се наслаждавам на  
своята мис!

(日本語訳) .....

会津若松の人たちは、みんな親切でやさしいです。彼らは、自然と古い日本の習慣を大切にしながら、興味深く、楽しい生活を送っています。

会津では、とても典型的な平和な雰囲気と日本の最先端技術の両方が融合しており、おもしろい体験ができると思います。

また、会津には、独自の歴史やお寺、お酒があり、とてもおもしろい所です。

## 会津大学

お名前 アルカディ・スゴンニコフ

出身国 ロシア

(所属校) University of Iizumi

(お名前) Arkady Zgonnikov, PhD student



Привет! Я приехал в Аizu-вакю  
тако как мне везло в жизни, но  
я не успел познакомиться  
с двумя большими достопримечательностями  
этого места - дворцом, это  
историческое, красивое место,  
и музейные местные жители,  
которые рады помочь в любой  
ситуации, а в Японии, это  
прекрасная страна, много  
интересного, которая отлично  
привлекает мой интерес. Еще,  
она от Японии очень в отличие,  
Наслаждаюсь, как в Японии познакомиться!  
ты же, как и я!

(日本語訳) .....

こんにちは!  
私は数ヶ月前、会津若松に来たばかりです。でも、すでに2つのことを感じています。

1つ目は、地元の人々が本当に親切で、元気で明るいということです。日本に来たばかりの私や家族のことをたくさん助けてくれました。

2つ目は、すばらしい自然が町中にあふれているということです。特に私の小さい娘は、会津が大好きです。

ぜひ、みなさんにも福島ですばらしい時間をすごしてほしいです。

## 日本大学工学部

お名前 ティオ・ホーヒン

出身国 マレーシア

(所属校) Nihon University

(お名前) TEOH HOE HIN



Semaktu belajar di Jepang, saya bukan sahaja dapat berkanan dengan kawan berbangsa jepun, tetapi juga bangsa korea dan lain-lain. Kehidupan semaktu belajar di luar negara sangat seronok.

(日本語訳) .....

日本での留学中に、日本人だけでなく、韓国や他の国の多くの友人ができました。留学生活はとても楽しいです。

## 東日本国際大学

お名前 サンジビ・クマル

出身国 ネパール

(所属校) हिगशी निपुन को नुसाई दोंईगकु

(お名前) संजिब कुमार पौडेल



इतिहास जापानको खतरा सानो  
गाँउ हो। इतिहास सानो भएर बाबा रसका  
हो। साथै सुविधा पनि। साभन किब, छै लागे  
सुविधायुक्त सोपेडु, सेन्ट्र एन्ड प्रस्ता हुन्।  
बाबो सभार फराकिलो भएकोले  
हिड-डुल्लु खटने अतिशय हो भन्नेको लागे  
एन्ड एन्ड सुविधा युक्त हुन्। पढ्न को लागे  
पढ्ने खुल्लो हो। बिचकय पनि खटने पात्र हुन्  
साथै पनि सहयोग हुन्... साथै रमाइलो खट्नु!

(日本語訳) .....

いわき市は日本の小さな町ですが、とてもきれいで美しいです。

買い物なども便利です。道は清潔で広く、歩きやすいです。

ここには勉強するためにとても良い大学があります。

先生は親切ですから楽しいですよ。



## CONTENTS

巻頭特集

### 留学生から後輩へのメッセージ

大学教育充実のための戦略的大学連携支援事業

「アカデミア・コンソーシアムふくしま」の構築による広域連携型学士力向上プログラム

#### 各大学の取組

- |   |                               |
|---|-------------------------------|
| 4 会津大学<br>ACF「国際化プログラム」を通じた留学生支援、<br>ふくしまの現状、情報を世界へ発信 | 5 東日本国際大学<br>留学生と地域の交流について    |
| 6 福島工業高等専門学校<br>福島高専での思い出                             | 7 福島学院大学<br>二つの海外研修 ～バリ島と韓国へ～ |

#### ふくしまを知り世界に発信2011 in 会津若松の実施について

- |   |  |
|---|--|
| 9 東日本国際大学経済情報学部 4年<br>ゾウレイ [ミャンマー]                | 10 東日本国際大学経済情報学部 4年<br>朱 美善 [韓国]           |
| 11 会津大学大学院コンピュータ理工学研究科 2年<br>チャミラ カルナティラカ [スリランカ] | 12 会津大学大学院コンピュータ理工学研究科 1年<br>チエン ウーフィ [中国] |
| 13 福島大学経済経営学類 3年<br>ダワードルジ アリウンゲレル [モンゴル]         | 14 福島大学共生システム理工学研究科博士課程前期 2年<br>シュコウ [中国]  |
| 15 参加者アンケートから                                     |  |

#### 日本から海外へ、海外から日本へ

日本から  
海外へ

- 16 ● サウスハンプトン大学に学んで  
日本大学工学研究科博士前期課程 2年 機械工学専攻 創成学研究室 安部田 泰
- 17 ● ルーマニアでの思い出  
福島大学行政政策学類 2年 今井 智奈海
- University Of Seoul Summer ProgramII 2011 ～情熱の韓国に触れて～  
福島大学経済経営学類 2年 佐藤 潤

- 18 ● ローズハルマン工科大学研修 現地報告  
会津大学博士前期課程 1年 山本 脩太

海外から  
日本へ

- 18 ● 寒いけど……  
日本大学工学部土木工学科 1年 シム テック チン [マレーシア]
- 19 ● 楽しかった日本  
会津大学 グレゴリー トービル [アメリカ]
- 日本での生活  
会津大学 ダリア バジェニナ [ロシア]

20

留学生  
関連資料

- 20 外国人留学生の受け入れ状況  
出身国・地域別留学生数
- 21 地方別・都道府県別留学生数  
福島県内高等教育機関における外国人留学生の受け入れ状況
- 22 国・地域別外国人留学生数
- 23 私費留学生の奨学金別受給状況  
留学生の寄宿状況
- 24 平成23年度 福島県内高等教育機関における  
研究・教育交流協定締結校名

# 「アカデミア・コンソーシアムふくしま」の構築による 広域連携型学士力向上プログラム



福島大学、会津大学、福島県立医科大学、いわき明星大学、奥羽大学、郡山女子大学、東日本国際大学、福島学院大学、日本大学工学部、放送大学福島学習センター、会津大学短期大学部、いわき短期大学、郡山女子大学短期大学部、桜の聖母短期大学、福島学院大学短期大学部、福島工業高等専門学校

福島県内所在の16の大学等すべてが、多領域の教育事業に共同で取り組むことにより、真の学力の引き上げ、福島県の教育水準の底上げを図ります。県土が広く大学等も地理的に分散する状況に対応し、各大学等の特徴に即して12のプログラム事業を展開します。

「豊かな地域性をもつ真の学力」が身に付く教育を共同で繰り広げ、有為な人材を地域に送り出すことを目指します。

## アカデミア・コンソーシアムふくしまについて

### 知と地の響鳴ふくしま〈知と地のネットワーク〉

[地域との響鳴] 知的リソースの集積と活用、総合的な連携体制

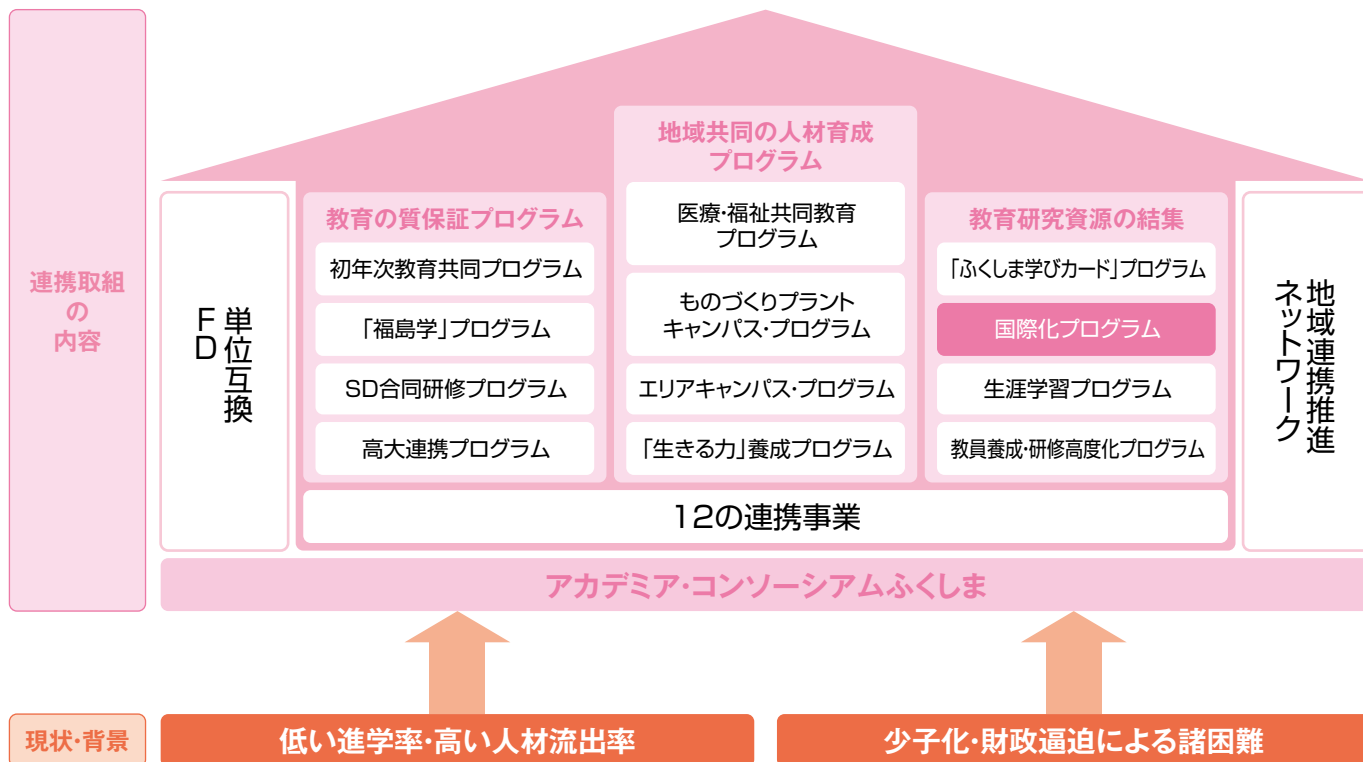


# 12のプログラムについて

期待される効果

福島県の高等教育の底上げ

高度人材育成による地域貢献



## 国際化プログラムについて

### 1. 事業の目的

留学生30万人計画が提起され、外国人教員の増加も含め地域の国際化が進展しています。県内大学が国際化を共通の課題としてとらえ、共同で以下の取組を行います。

### 2. 事業内容

#### ① 福島異文化弁論大会の開催

県内大学の留学生及び日本人学生が、福島県民の前で異文化に触れた体験を発表する弁論大会を開催します。異文化に対する相互理解、国際親善への寄与が期待され、また県内の留学生が一堂に会する機会を設けることで複数大学の学生同士が切磋琢磨しあえる機運を高め、県内留学生のネットワークおよび学習意欲の向上への動機づけを図ります。

#### ② 「ふくしまの留学生と国際交流」の編集・発行

福島県内の留学生に関するデータ、留学生支援の状況等を冊子として発行します。

#### ③ 短期語学研修の相互乗り入れ

県内各大学が実施する海外短期語学研修について、他大学の学生が参加できる制度を構築することにより、県内大学生の国際経験の機会を増やし、国際性豊かな人材育成を目指します。各大学の個別の事情を調査し、仕組み作りのための協議・検討を関係機関(民間旅行会社等含む)と行います。

#### ④ 留学生・外国人教員のための日本語研修

留学生、研究者・教員及び配偶者等を対象に日本語研修を共同で実施することにより、コミュニケーション能力を高め、安全で自立した生活を確立し、日本文化の理解を深め積極的な地域社会への参加に繋げることを目指します。

また、日本の企業風土や文化的背景、ビジネスの場面に適した表現を習得するための機会を確保することにより、日本でのインターンや企業・各種機関への就職を目指す留学生を支援します。



事業名	事業別主務校	事業内容
1.初年次教育共同プログラム	福島大学	①初年次共通テキスト『福島で学ぶ』編集・発刊 ②高校教諭との合同討論会「学ぶ権利と真の学力」
2.「福島学」プログラム	福島県立医科大学	①「福島学」共通授業の開講 ②『福島学』共通テキストの編集・発刊
3.SD合同研修プログラム	福島大学	①階層別研修・目的別研修・専門研修の実施 ②短期・中期の人事交流
4.高大連携プログラム	福島大学	①高校生のゼミ体験コース、エリアキャンパス事業参加 ②大学と高校による保護者のための進学セミナー ③専門分野別進学ガイダンス
5.医療・福祉共同教育プログラム	いわき明星大	①福祉系NPOインターンシップ ②学生による地域医療福祉調査プロジェクト ③福祉先進国学生視察団
6.エリアキャンパス・プログラム	福島大学	①エリアキャンパス・プログラム
7.「生きる力」養成プログラム	福島学院大	①「起き上がり小法師」DVDドラマ制作 ②カウンセリング・プロセミナー
8.ものづくりプラント キャンパス・プログラム	日本大学工学部 福島工業高等学校	①工場訪問シリーズ ②ふくしま・ものづくりコンテストの開催
9.「ふくしま学びカード」プログラム	福島大学	①大学等施設の学生・市民開放
10.国際化プログラム	会津大学	①福島異文化弁論大会の開催 ②「ふくしまの留学生と国際交流」編集・発刊 ③短期語学研修の相互乗り入れ ④留学生・外国人教員等のための日本語研修
11.生涯学習プログラム	桜の聖母短期大	①公開講座の共同開催、共同パンフレットの作成 ②職業別市民講座の開催 ③市町村議員講座
12.教員養成・研修高度化プログラム	福島大学	①教員養成における共同 ②免許状更新講習の協同実施 ③教員研修支援ネットワーク構築



# ACF「国際化プログラム」を通じた留学生支援、 ふくしまの現状、情報を世界へ発信

会津大学 国際戦略本部 川口 立喜

会津大学では、アカデミア・コンソーシアムふくしまの「国際化プログラム」を通して、様々な活動を展開してきた。ここでは、主に東日本大震災を経て新たに行った取り組みを紹介する。

### ○震災後の留学生支援

未曾有の震災を経験し、その後も断続的に続く余震、錯綜するメディアの情報が留学生の不安を助長し、数日ではあったが週末にかけて、電話やインターネット等を介して友人や家族に連絡が取れない状況が、留学生の孤立化をもたらし、動揺にさらなる拍車をかけた。また、原発の事故を受け、自国の政府や家族に帰国を促された留学生の多くが、自国や他県に一時退避した。このような状況の中、自ら会津に残ることを選択し、被災地支援に赴きたいと志願する留学生もあり、彼らの意思を尊重するとともに、留学生が通常の生活に一日でも早く戻れるようにするための取り組みを行ってきた。

特に自国メディアのみならず、世界各国で様々な情報が錯綜する中、日本の報道においては地震速報や原発の現状説明の

多くが日本語で発信されるため、その内容を理解できない留学生からの問い合わせが殺到したことを受け、彼らの不安を少しでも解消するために、丁寧に対応すると同時に情報提供の在り方についてもガイドラインを設定する必要があると強く感じた。

震災後、留学生が通常の学生生活に戻れるように、学内の関係部署と連携し、また留学生を支援する地域団体と協力しながら、留学生特別支援室DRIO (Disaster Recovery Information Office for UoA International Student)を本学の国際戦略本部に設置した。この支援室チームには、大学教職員のみならず、留学生の研究指導教員、海外からの教員に協力してもらうことにより、自国の言語や観点から、現状について留学生に的確に説明してもらうことが可能になり、効果的なコミュニケーション、情報提供を実施することができた。

## 留学生における震災復興支援、ふくしまの現状、情報を世界へ発信

### ○留学生の被災地復興支援への参画

震災後、自ら会津に残ることを選択し、被災地支援に赴きたいと志願した留学生もあり、実際に彼らとともに、何度か被災地でのボランティア活動に参加した。特に自国で大地震、津波を経験したことのある留学生にとって、被災地復興支援への参画はごく自然なことであり、「まずはできることから」「ふくしまの現状を自国のみんなに伝えたい」という思いから、被災地でのボランティア活動を積極的に行うことになったのである。また、彼らから得た情報をもとに一時退避からの渡日を決める留学生がいるなど、学生の学生による学生のための情報提供は非常に効果的であると実感した。

### ○ふくしまを知り、世界に発信2011in会津若松

例年は弁論大会を実施していたが、今年度は10月8日に「ふくしまを知り、世界に発信2011 in会津若松」と題し、パネルディスカッションを本学で開催した。パネルディスカッションでは、福島県内の高等教育機関に在籍する留学生と日本人学生が一堂に会し、地震とは無縁の国や地域(スリランカ、モンゴル、ミャンマー、中国、韓国出身の学生)から留学している学生をパネリスト

として、震災の発生時における自らの経験談と、震災後に取った行動などについて、様々な意見交換を行った。

また、現在の留学生活の様子や、ふくしまの現状など、客観的および具体的な事実を、ふくしまでの生活を心配する自国の家族や友人だけでなく、世界に向けてどう伝えていくべきか、留学生の視点から考える情報発信のあり方について、会場の参加者からも多くの意見が寄せられた。

「実際にボランティア活動を行うことによって、今回の災害の大きさを目の当たりにし、感じることで、ニュースなどで流れる映像よりもはるかに心に染みわたる何かを感じられた。人との温かい繋がりを感ずることができた。大好きな福島をより好きになる事ができた。」など、自身の強い思いを語る留学生がいた。

さらに、ふくしま、会津をもっと知ってもらうため、同留学生と日本人学生と一緒に、会津若松市内の歴史文化施設を訪問した。こうした文化と歴史を学ぶ機会を通して、留学生と日本人学生が互いの国籍を越えた交流を図り、国際的な相互理解を深めることができた。



▲留学生の被災地復興支援への参画  
がれぎの撤去作業



▲ふくしまを知り、世界に発信2011in会津若松  
留学生によるパネルディスカッションの様子

復興への過程が長期化する中、原発の事故による風評被害への対策もまた、重要な課題の一つであるが、容易に払拭できないのが現状である。しかし、ふくしまの大学の現状を世界に発信することが、これから私たちができること、すべきことであり、今後も地域の特性を生かし、留学生支援、グローバル人材育成に取り組んでいきたいと切に願う。



# 留学生と地域の交流について

東日本国際大学経済情報学部教授  
国際委員長・留学生別科長 田村立波

最近、十数年前に本学を卒業した元留学生が因らずも前後していわきを訪ねてきました。一人は中国の出身で、帰国後日系企業に勤め、数年後に自分の会社を興し、現在は日本でデザインした製品を韓国で生産して中国で販売するという「国際的」な企業を経営しており年に数回日本に訪れています。震災後の母校と6年間も暮らした町をこの目で見て、そして世話になった人々にも会ってみたかったそうです。もう一人は台湾で幼稚園を経営しており、園児に日本語や日本の童謡を教えるのを特色としているそうです。母親をも連れてきた彼女曰く、今回の旅行は「感謝の旅」だということです。当時世話になった大学の職員と抱擁した場面を見て思わず目頭が熱くなりました。

留学生にとって地域が「第二の故郷」です。留学生は大学で教育を受け卒業後に巣立ち、そして社会の一員に立派に成長していく「出世魚」であると同時に、苦しくも楽しい学生時代を送った町に一度でも帰ってみたい「回遊魚」でもあるのです。

地域にとっては、留学生が「貴重な資源」です。日本の関係省庁による厳格な審査を経てようやく留学の夢が実現された彼らは、高校または大学を卒業してすぐ来日した人もいますが、来日する前は教師、ジャーナリスト、経理担当者、合弁企業の通訳、会社員としてそれぞれの国で活躍していたキャリアの持ち主もいます。グローバル化が進みつつある地域においては、多士済々のこの多国籍集団を活かさないわけにはいきません。

本学では地域活動や市民との国際交流への留学生の参加を推進してきました。これまで、主に「国際理解講座」、「いわき・ふくしま地球市民フェスティバル」及び「国際交流研修」などの地域におけるメインイベントに積極的に参加しました。ここにその一部を取り上げてみたいと思います。

国際理解講座は、3年にわたり、いわき市の民間国際交流団体の主催によって約1カ月の間に4回にわけて市内の文化施設で実施されました。一昨年の例によりますと、1回目と2回目は同じような形式で、中国、韓国、ミャンマーの学生が講師として、それぞれの国に関する基本状況や文化社会事情、日常的によく使われる言語表現などを紹介しました。3回目は「ここがヘンだよ、日本(外国)」をテーマに、留学生が日本に来てから不思議に感じたことや戸惑っていることを来場者に質問し、そして答えてもらうという形で進められました。留学生からの突飛な質問に対し、聴講した市民の皆さんが積極的に応じて、留学生が納得するまで説明してくれました。講座は終始和やかな雰囲気に入れられ、笑い声が絶えることなく、大勢の市民による積極的な参加を得て成功裏に終了しました。

4回目は「留学生に教わるお国自慢料理教室」として、留学生7名と市民の皆さんが和気藹々な雰囲気の中で、中国で最もポピュラーな餃子とユーツァイ(揚げパン)とミャンマー風うどんを一緒に作り、皆で頬張りました。この講座も人気を呼び、改めて食文化の人々を巻き込ませる力の大きいことを思い知らされました。

恒例の地球市民フェスティバルにも大勢の留学生が参加しました。直近の例では、ミャンマーからの留学生がミーシェという民族料理を、中国からの留学生が定番の餃子とユーツァイを作り、長い行列ができるほど盛況で、市民の皆さんも舌鼓をうちました。また、ステージで内モンゴルの学生が母国の民族楽器の馬頭琴を演奏しました。後半は日本の名曲を馬頭琴で表現するという新たな試みも行い、スカウトの話が持ちかけられたほどの実力で注目を集めました。同じステージで、ミャンマーの学生7人が伝統舞踊を華やかに披露し、会場を一気に盛り上げました。

また、青年の家などの公的交流施設を利用して、1泊2日による国際交流研修も開催しました。民間国際交流団体の後援を得て、学生ボランティア団体と共同で開催。本学からは各国の留学生が参加し、県内外から集まってきた高校生、大学生と交流をしました。わずか2日間という短い時間でしたが、プログラムも目白押しで大変充実した、実りのある交流を実現できたと思われます。留学生の中には、入学したばかりの学生もいました。最初は果たして日本人学生と交流できるのかと心配していましたが、先輩の助けもあって、何とか言語の壁を乗り越え、互いに理解を深めることができるようになり、最後は友達となって、別れを惜しんでいました。特に、大自然での「鬼ごっこ」などのゲーム活動に参加したときは、参加者全員が一丸となって活動し、留学生と日本人学生の区別がつかないほど、ともに楽しんでいました。

以上はほんの一部に過ぎません。毎年のように、地域の小学生や高校生との交流も実施しています。これら一連の国際交流活動に本学の留学生が主体となって、積極的に参加し、それぞれの母国の情報発信をするともに、市民との交流を楽しんできており、単調気味の留学生活に彩りを飾り、印象の深い思い出作りにもつながっています。一方、市民の皆さんも、留学生との触れ合いによって、諸外国事情に対する理解を深め、見識を広めることになると考えられます。東日本大震災が発生してから1年が過ぎ去ろうとしている現在では、日本中で「絆」に対する再確認・再認識が得られました。留学生と地域の「絆」も、復興が確実に進んでいる福島においてはますます強まっていくことが期待されます。



# 福島高専での思い出

福島工業高等専門学校 物質工学科  
ポンピバック・ダーラー

福島高専に入学した当初から現在まで、およそ3年  
間が経ちました。入学したばかりのころを思い出すと、3  
年生で中途編入する私は、同級生である周囲の仲間  
とどのようにコミュニケーションをとればよいか、とても心  
配でした。その当時、福島高専に留学生は多くいたの  
ですが、ラオスから来たの私だけでした。様々な悩みこと  
がありましたが、1ヶ月ほど経つと新しい生活と環境にも  
馴れ、日本人の友達もできました。授業で理解できな  
いことがあったときも、先生方と友達が優しく説明してく  
れました。本校での施設を有効に活用し、友達と頻繁に  
相談をしながら、外国での勉学という難題も次第に克  
服してきました。

特に寮での生活には厳しい規律がありました。最初  
は途感いましたが、今後社会に出てから様々な困難に  
負けず仲間と協力して生活をしていくうえでの貴重な訓  
練になったと思います。寮では楽しいこともあります。ス  
ポーツ大会をはじめとする寮の定例活動や恒例行事に  
参加し、寮生仲間と競技を楽しみました。皆と和をたも  
ち、集団生活をスムーズにおくる心構えを身につけまし  
た。さらに、陶芸などの日本文化を学ぶイベントも興味  
深いものでした。



▲物質工学科の同期生と

順調な留学生活な生活を続けているあいだには、悲  
しいこともありました。今年3月11日に起こった東日本  
大震災・大津波・福島原発事故で多くの人が被災しま  
した。まさに被災地で学ぶ私はそれを目の当たりにして、  
とても悲しく思いました。この津波の影響を受けた友達  
もいましたが、皆が無事で、それは何よりも幸いなこと  
でした。さらに、福島高専の留学生は母国政府の方針な

どがあり、私をのぞいて皆転校してしまいました。これは  
とても寂しいことでしたが、私は卒業まで本校で勉強を  
続けています。「どうして転校しないの?」、「両親が心配  
しないの?」と、友人にもたずねられました。しかし、ここ福  
島高専で先生方から工学的な多くの知識を得たり、友  
人をもつ私は、何があってもここで皆と一緒に頑張りた  
いと思ったのです。

ラオスから福島高専に留学した学生は初めてです  
が、これから福島高専に留学するラオスからの学生が  
将来増えるのを私は祈願しています。私自身にとっての  
福島高専での日々は残すところ4ヶ月になりました。これ  
から卒業研究をまとめるなどの大仕事が待っています。  
友人や先生方との日々を楽しみながら、ここでの勉学の  
締めくりに全力を尽くします。



▲卒業研究、がんばっています!

国際交流担当委員より:12人いるはずだった留学生は各国  
政府の指示により国内の他の高専へ転校してしまい、本年度  
はダーラーさんひとりでした。いろいろ寂しい思いがあったと思  
いますが、最後までよくやってくれました。大学へ行って充実した勉  
学生活を送ってください。

# 各大学の取組

The activities of each university  
in Fukushima

## 福島学院大学



# 二つの海外研修 ～バリ島と韓国へ～

## バリ島海外研修

2011年9月19日～27日(9日間) 研修参加人数45名  
記 土屋美咲姫・目黒彩香・横山真衣子

### ☆ケランビタン宮殿☆

ケランビタンでは、本格的な民族衣装を身にまとい、模擬結婚式を行った。日本の化粧がとは違い、口紅やまゆげが濃くて色鮮やかだった。

バリの人々は時間をたくさん使ってもてなすので、着るのも化粧するのも全員終了するのに3時間以上かかった。バリの方々のもてなす気持ちが伝わり、嬉しかった。

今回の日本の震災を気にかけてくださり、励ましの言葉をたくさんいただいた。

### ☆バリのご飯☆

バリのご飯はほとんどが辛くて、なかなか食べられない学生もいた。最終日にお料理教室でスープを作ったのだが、様々な香辛料や具材を使っていることが分かった。

おもてなしで出されたお菓子はココナッツベースでとても甘く、日本では食べたことがない味だった。

豚の丸焼きも出され、見た目に驚いたが、食べてみるとおいしかった。



▲本格的バリ民族衣装をまとった本学研修生

### ☆バリの子どもたち☆

バリの子どもたちは、いきいきしていて活発だった。子どもたちは日本とバリという国境を越えて短い時間でありながら深く関わってくれた。私たちが披露したダンスには笑顔で声援を送り、積極的に参加してくれた。

### ☆まとめ☆

バリ島海外研修を通し、大きく実感したのは日本の豊かさである。水、食料、衛生面すべてにおいて、普段あたり前だと思っていたことがどれだけ恵まれているのかを気づかされた。世界には日本のように恵まれず生活している人々がたくさんいる。直接的に関わることはできないが、私たちが今何をしてあげられるのか考えなければならない。そのことの今回の海外研修旅行で身に染みて感じる事ができた。



▲国境を越えて  
笑顔を振りまく  
バリの子どもたち



▲ケランビタン宮殿で出された  
バリの伝統料理

## 韓国研修旅行

福島学院大学短期大学部保育科1年 渡邊玲奈  
福島学院大学短期大学部食物栄養科1年 渡邊星奈

今年9月20日から24日にかけて本学国際理解演習で韓国を旅してきました。韓国の食文化を体験し歴史ある世界遺産などを観光しました。またソウル市幼児教育協会を訪問し、韓国における幼児教育の現状と幼児の食の教育について学びました。

この視察で感じたことは、私達には想像していなかった程の素晴らしい施設が備わっていました。ここで、韓国の子どもの食、病気、予防接種などの諸問題の取り組みについて、また韓国に古くから伝わっている昔話や行事、遊びなどについてのお話を聞きました。韓国の子ども達が心身ともに健やかに成長できるように素晴らしい環境が整えられていることを実感し感銘を受けました。

韓国のテーブルマナーは日本のマナーとは違うことに気がきました。韓国では食器は手に持たずそのまま匙(さじ)で食べるのが礼儀とされています。日本ではお行儀が悪いと怒られてしまう食べ方です。しかし韓国ではこれが行儀の良い食べ方であると学びました。私たちが実際に挑戦しましたが意外と難しく、つい手に食器を持って食べてしまいました。しかし、韓国食はとても美味しく今度また是非食べたいと言う気持ちにさせました。

建設されて600年が経つチョンミョという世界遺産を観光してきました。1995年ユネスコ世界文化遺産に登録されておりますが、その建造物の素晴らしさと魅力は18歳の私たちにはとうとう理解することができません。しかしその中にしずかに佇んでいると、ゆったりとした時間の流れの中に心身の癒しを感じることができました。疲れたり、行

き詰まった時などにまたきてゆっくりしてみたいと思いました。また10年後、20年後にこの世界遺産を見れば、その素晴らしさが実感できるのだろうと思いました。

この研修旅行をとおして、私たちの韓国に対する思いは行く前とはかなり変わり、韓国に対する親しみがますます高まり、更にもっと韓国を知りたい、これから何度でも行ってみたいと思いました。



ふくしまを知り  
世界に発信2011  
in 会津若松  
の実施について



この事業は、福島県内の高等教育機関に在籍する留学生と日本人学生が一堂に会し、各国の留学生が地震とは無縁の国や地域から日本に来た留学生がパネリストとして、東日本大震災の発生時における自らの体験と震災後の行動などの意見交換を



することを目的とした事業です。USTREAMを用いて世界に発信することで、福島での生活を心配する母国の家族や友人に、世界に向けて、現在の留学生活の様子や留学生の視点から情報発信をすることができ、またその情報発信そのもののあり方についても、会場の参加者からたくさんの意見が寄せられました。

同日の午後には、“ふくしま”を更に深く知ってもらうため、会津若松市内の歴史文化施設にて日本文化や歴史の学習を訪れ、日本人学生と一緒に、互いの国籍を越えた交流を図り、国際理解を深めました。

<b>日時</b>	平成23年10月8日(土) 10時30分～17時00分	<b>会場</b>	会津大学および会津若松市内 (日新館、鶴ヶ城)
	[主催] アカデミア・コンソーシアムふくしま		[参加者数] 計78名



# ふくしまを知り、 世界に発信

Get to know Fukushima,  
and send a message to the world



東日本国際大学経済情報学部 4年

Higashi Nippon International University  
Faculty of Economics and Informatics / Fourth Year Student

## ゾウレイ [ミャンマー]

Zaw Lay

2011年3月11日、その時私は自分のアパートにいました。揺れは初めは小さかったのですが、だんだん立つことができないくらい大きくなっていきました。外を見ると近所の家も大きく揺れ、電信柱からはショートするパウンパウンという音が聞こえました。プリンターやパソコン、テレビ、本棚などが全部倒れ、部屋全体が物で散らかりました。部屋の隅にあったベッドも10cmぐらい壁と離れていました。外へ出ると、近くの日本人の方たちも次々と外に出て、両親や親戚たちに電話をかけたたりしていましたが、連絡がとれなくなっていました。私も友達や先生方に連絡してもできなかったので学校へ行きました。学校に着くと、先生方や学生たちもグラウンドに出て避難していました。地震が何回も来ているから建物の下にもう入らないように、先生方に注意されました。まもなくこの地震は震度7、マグニチュード9.0と分かりました。

その夜私は家に戻って片付けをしました。片付けが終わっても弱い地震が何回も来ていたので一晩中眠れませんでした。12日は朝10時ぐらいから水が出なくなりましたが、学校からおにぎりやパンなどが貰えて助かりました。13日は近くの小学校に先生と留学生全員で避難し、翌朝東京にある大学に移動しました。東京までは道

路の状況が悪く、夜遅く到着しました。それにも関わらずバスから降りると先生方が拍手しながら迎えてくださり、その優しさに感動して涙が出ました。学生のみなさんも初めて会った私たちを、暖かい心で迎えてくれました。少し休んで夜10時半ぐらいに3日ぶりのシャワーやお風呂を入れることができ、疲れがとれました。みなさんにお世話になった感謝の気持ちは言葉では言い表せません。

こんな思いがけない事で私は友達15人と3月20日、5年ぶりに帰国しました。国にいる間は日本の情報がずっと流れていました。本当のこともあるし、もっとひどい情報もありました。すべての人に正しい情報を伝えることは不可能ですが、私は身近な人たちには本当の情報をできるだけ伝えようと努力しました。この震災を日本全体がもう終わりだとしてらえては間違いである事、日本は強い国なので大丈夫とも伝えました。

私の住んでいる所は現在ほとんど復旧し、自分が国へ帰る前とは全然違います。私は今、福島県に住み、スーパーで県産品を買い、それを食べ元気に生活しています。みなさんも安心して、日本に来る日を楽しみにしてください。

On March 11th, 2011, I stayed at my flat. The quake was small at first, but was getting gradually bigger and stronger than I could remain standing. Looking out of the window, houses nearby went on quaking strongly, and I heard the sound of electric wires' short-circuiting. All things including printer, personal computer, television and book-shelves fell down, and were scattered everywhere in the room. My bed at the end of room also moved about 10 cm far from the wall. When I went out of the room, Japanese inhabitants living nearby went out one after another and telephoned their parents and relatives, but could not make contact with them. I also tried hard to telephone my friends and teachers, but in vain, so I went to the University. When I arrived there, I found the University staff and students had taken refuge in the ground. The staff warned us not to enter the building because a series of earthquakes occurred at close intervals. Soon we found this quake was a tremor of the 7th degree on the seismic scale and a magnitude of 9.

At that night I returned home and put my room in order. After having done so, small quakes happened many times, so I could not sleep all the night. On the 12th the water supply was cut off at about ten o'clock in the morning, but we were given rice bowls, bread and some food, so we felt relieved. On the 13th we took refuge in the primary school nearby with the university staff and all the foreign students. Next morning we moved to a certain University in Tokyo. The road to Tokyo

was in a very bad condition and in a mess, so we arrived there late at night. Nevertheless, when we got off a bus, the University staff received us with a clapping of hands. I was moved into tears with their kindheartedness. Students also gave a warm reception to all of us they met for the first time. After a short rest, at around half past ten I could take a bath and shower for the first time in three days, so I recovered from my fatigue. I do not know how to express my gratitude to them for their warm-hearted help.

Because of such an unexpected disaster, on March 20th I returned to my country with fifteen friends of mine after five years' absence. During my stay in my country a lot of information about Japan were conveyed to my country all the time. Among them there was true information but far worse one. I think it impossible to convey correct information to all the people, but I tried hard to convey true information to people in my immediate circle. I told them that Japan at large has not been completely damaged by this disaster and that Japan is a resilient nation.

The area where I live has almost returned to the former condition now, and has been quite different from the situation of the former time when I returned home. I live in Fukushima Prefecture now. I buy products made in Fukushima at supermarkets, eat them and live in good health. Please look forward to the day when all of you will come to Japan without anxiety.

# ふくしまを知り、 世界に発信

Get to know Fukushima,  
and send a message to the world



東日本国際大学経済情報学部 4年

Higashi Nippon International University  
Faculty of Economics and Informatics / Fourth Year Student

朱 美善 [韓国]

Ju Misun

東日本大震災が起きた3月、その当時に私は就職面接が目前に迫ったため、学生マンションの自室で面接の準備をしていました。そのとき、今まで一度も聞いたことない音がケータイから鳴り、宮城県で地震が発生するというメールが届きました。今までの地震だとそんなに強い地震ではなかったので、たいしたことないと思いきや、急に強い揺れがあつて驚きました。すぐ机の下に入り、母に電話をして「助けてください」と悲鳴を上げたら、ボイスフィッシング(詐欺電話)と間違われ、電話が切られました。もうダメか、死ぬのかと一瞬思ったのですが、怪我なく無事でした。親はその後、ニュースを見て気づき、家がてんやわんやの大さわぎになりました。

親がとても心配をしたので、地震が起きて5日後、母国へ一時帰国をしました。韓国のメディアではとても過激な情報が流れていて、韓国だけではなく海外では日本全体が被災したかのような大げさで不正確な報道が流れたため、これから日本での生活はできるのかなどたくさん悩んだあげく、やはり大学卒業だけでも終わらせたいという決心をして、日本に戻ることにしました。地震や放射線漏れに不安を抱えたままいわき市に戻ってきましたが、様々な情報に接するうちに、普通の生活に支障が無いということを理解できるようになりました。そして、マ

スメディアの影響力の大きさとその役割の重要性を再認識しました。私は、日本在住の外国人を含め福島の人々のために自分から何かできることはないかと思い、就職活動をした結果、県内の放送局に内定をいただくことができました。これからは地域の困っている人の話を聞いてその思いを発信していきたいと思っています。

留学生である私ができること。私は、情報発信が非常に大事だと思います。国内でも福島全体が被災されたような雰囲気があるので、留学生が書き込むブログを作ったらどうかと思います。ブログは、日本だけではなく海外でも見るできるので母国語も一緒に書いて載せると、国内だけではなく海外の認識も少しは変えることができるのではないかと思います。

内容は日記のように生活全般の話を書いて、生の声を発信することが重要です。留学生だからこそ今の現状を素直に書けると思うので、全国の皆さんに正しい考えを持っていただきたいです。

When the great disaster of Eastern Japan occurred in March, I was preparing for an interview at my student flat because the interview was close at hand. Then I heard my mobile ringing loudly, and I received the mail informing me that the earthquake would happen in Miyagi Prefecture. As the earthquakes that I had experienced before were not so strong, I thought it was not so serious, but I was surprised that a very strong quake struck suddenly. Immediately I went under the desk and telephoned my mother, shrieking, 'Help me!' My mother took my call for a phishing and cut off the line. In a moment I felt hopeless and was afraid of passing away, but I was safe without any injury. Afterwards my parents learned the fact from the news on TV, and all my family were entirely upset and made a great uproar.

My parents were very anxious about my life, so I returned to my country five days after the earthquake happened. A great variety of extreme and inaccurate news were conveyed through the Korean mass media. Not only in Korea but also in foreign countries was conveyed such hyperbolic and inaccurate information that Japan at large was devastated. After having wondered for some time whether I could lead a normal life back in Japan again, I finally made my mind to return to Japan and graduate from a university there and. With all my anxiety about earthquake and radioactive contamination, I came back to Iwaki. While getting a lot of detailed information, I was able to understand that we can

lead everyday life smoothly without a hitch. So I had a new appreciation of the great influence of the mass media and the importance of their role. I thought I could do much for Fukushima inhabitants including foreign people living in Japan, so I was engaged in job-seeking activities. As a result, I could secure a position in a broadcasting station of Fukushima Prefecture, which will star after graduation. Afterwards I want to accept the feelings and opinions of inhabitants suffering from the disaster and to send their message to the world.

I think it very important for us foreign students to convey accurate information about the distressed-area to the world. Also in Japan, there is such a misconception atmosphere that all the areas of Fukushima have been disaster-stricken, I think it useful to start a blog-site that foreign students can write in. As such a blog can be seen in foreign countries as well as in Japan, I think it possible to change the view of Japan overseas as well as in Japan, if any information is written in their native languages, too.

I think it important to write about our daily life and to convey such a frank comment or voice as recorded in the style of a diary. I think that foreign students only can make a frank description of the present situation of life, so I want all the people in Japan to have a true understanding of the present situation of the disaster-stricken area.



# ふくしまを知り、 世界に発信

Get to know Fukushima,  
and send a message to the world



会津大学大学院コンピュータ理工学研究科 2年

The University of Aizu  
Graduate School of Computer Science and Engineering, Second Year Doctoral Student

## チャミラ カルナティラカ [スリランカ]

Chamila Carunatilake

私はスリランカ出身のチャミラ カルナティラカです。私は3年半前に日本にきました。現在、私は福島県会津若松市にある会津大学大学院、博士課程の2年生です。私は2011年10月8日に会津大学で開催されたパネルディスカッションに参加しました。このイベントには、福島県に在学中のたくさんの留学生や日本人学生が参加しました。このイベントは、3月11日に起きた、東日本大震災の体験を分かち合うとても良い機会となりました。私は主に、震災にどう向き合ったか、また、東北以外の人にどうしたら本当の姿を伝え、いいイメージを取り戻せるかについて話しました。

スリランカには、地震はありません。ですから、私は日本に来るまで地震というものを体験したことがなかったので、大きい地震は本当に怖かったです。

あの日、私はパネルディスカッションが開催された建物と同じ、大学の研究棟の3階にいました。サイレンが鳴り響いても、私は何をすれば良いのか全くわかりませんでした。そして、それから数秒で地震が始まりました。そこでやっと、建物から逃げなければならないと気づきました。階段で、大きな揺れがありました。私は他の人たちと一緒に、何とか建物から出ることができました。揺れは数分続き、安全だと思っただけで機嫌が悪くありませんでした。しかし、その後数週間は何千もの余震が続いたので、完全にもう安全だとは思っていませんでした。

そして、地震の後には、核と放射能のニュースが飛び込んできました。最初は、とても怖かったです。なぜなら、それは誰にも予想できなかったことだからです。それから、私たちはインターネットでたくさんの文献を読み、テレビや他の報道で説明している状況をできるだけ理解しようと努力しました。

これらが落ち着いても、生活は依然として大変でした。会津では、ガ

ソリンや食べ物が不足し、全てのコンビニエンスストアの商品がからっぽになってしまったのです。わたしたちは、主にカップ麺と魚の缶詰を食べて過ごさなければなりません。運よく、私たちは大学からお米をもらうことができたので、時々、お米の食事でも食べることができました。私の家族や友人は、本当に私のことを心配しました。一日に何度も電話をかけてきて、全てが通常通りに戻るまでスリランカに戻ってきてとお願いされました。しかし、私は、帰国しないと決めました。そして、それからの大半を大学で過ごしました。その時点で、大学ではお湯が使えませんでした。4月上旬だったので、水が冷たかったです。私たちは我慢して、冷水のシャワーを浴びていました。

その時期、私は放射能について資料を読んだり、地震の経験を書いてブログに載せることに時間を費やしていました。ブログはスリランカの人たちが見るものだったので、彼らの国での間違っただけでなく、本当の情報を伝えなかったのです。また、私たちは会津若松の避難所を訪問して、ボランティアをする機会がありました。また、山形大学の学生と一緒に津波の被害のあった地域についてボランティアもしました。被災した地域を見るのは、辛かったです。そこに住む人たちの為に何かできてとてもうれしかったです。

何週間かして、生活は少し良くなりました。そして、5月から普段通り新しい学期が始まりました。

これらの経験は、よかったとは言えませんが貴重な体験ができました。私は、こんな大震災が起きた時の日本人の行動に驚きました。日本人の強さを感じました。私はそのような勇敢な人々と私の生活を送ることができてうれしいです。私は、東北と日本がすぐ復興することを願っています。

I came to Japan three and half years ago. In Sri Lanka we do not have earthquakes. So I had never experienced earthquakes before coming to Japan. Therefore, the big earthquake was scary for me.

On that day, I was in the corridor of the 3rd floor of research building. When I heard the siren I didn't know what to do. Then few seconds later it started. Then I realized I should get out from the building. Even with the big shakes of the staircase I managed to get out with the other people who did the same. After the earthquake we got the news about the nuclear and radiation problem. It was scary at the first time because nobody among us had an idea about it. Then we read many articles in the internet and tried to understand the situation that they explained in the TV and the other media.

After these events, life was not easy. We didn't have enough gasoline and food in Aizu Wakamatsu. All the convenient stores were empty. So we had to eat cup noodles and some tinned fish mainly for our meals. Luckily we received some rice from the university so we could eat rice-meals once in a while. My parents and friends were really worried about me. They called me several times a day and asked to

come back to Sri Lanka for a while until everything becomes normal. But I decided not to go back. I stayed in the university most of the times. At the time University didn't have hot water. It was early spring so the weather was cold. Always we had to have cold water shower which was not pleasant at all.

Mostly, I was spending my time reading on radiation and writing on earthquake and post-earthquake experiences. I posted them in my blog which is for Sri Lankan readers, to give the real image of the situation which is different from the image that media has made in their minds.

After several weeks life became much easier. We started our regular routines with the beginning of the new term of the university on May.

As a whole, it was not pleasant but a good experience. I surprised to see the reaction of Japanese people in such a big disaster. I realized how strong they are. I am privileged to live my life among such brave people. I wish Tohoku area and Japan would recover soon.

# ふくしまを知り、 世界に発信

Get to know Fukushima,  
and send a message to the world



会津大学大学院コンピュータ理工学研究科 1年  
The University of Aizu  
Graduate School of Computer Science and Engineering, First Year Doctoral Student

## チェン ウーフィ [中国]

Wuhui Chen

私は中国の福建省出身です。地震にはほとんどないです。地震は何回も体験しましたが、ほとんど弱い地震です。強い地震はどうなるかわからないです。東日本大地震発生の際に、私は先生のofficeで先生とmeeting中です。最初は大学のannounceが来て、演習かもしれないと思いました。meetingが続きました。数秒後、最初の弱い揺れが来て、普通の地震ですぐに治まると思いました。いすにそのまま座りました。気をつけていませんでした。そのとき、強い揺れが来ました。カベの本が落ちました。私はこの揺れは最後の揺れだと思いました。いすにそのまま座りました。でもどんどん揺れが強くなりました。また、たなに入っていたものやつくえのうえにあったものがばらばらになりました。先生と私はtableのしたに避難しました。私はあたまのなかで「つぎは何が起こりますか」と考えました。数十秒後、地震はどんどん小さくなりました。先生とみんなで外に避難しました。初めて強い地震を体験しました。恐怖の時間がほとんどないです。自分を守る余力もできない、無力な人間だと思いました。

その数日後、海外のvideoの情報を見て、どんどん怖くなりました。被災地に住んでいた多くの外国人のように、自国に帰りました。一方で日本人は冷静な行動でき

て、お互いに助け合っていてほんとうに勉強になりました。

地震発生後、internetを通じて友達からいろいろな質問と見舞いが来ました。その中で、一番印象に残ったものは皆が福島の様子があまりわかっていなかったことです。

いまでも、日本の旅行業とくに福島の旅行業は予約はほとんどない現状です。

なぜなら皆福島、日本の放射線物質が心配です。日本は第2の故郷として、皆を愛しています。だからいまこそ日本人とひとつになって、がんばる責任があると思います。まずは、世界にたっしい情報を発信しましょう。たとえば、会津の放射線物質は世界の平均水準以下です。もう大丈夫だと世界に発信しましょう。皆は会津にも旅行に来ると信じています。次に、福島産のものを安心して食べてください。米とか野菜は放射線物質が水準以下のものだけ売られています。だから安心して食べてください。最後に、心から日本は大丈夫だと信じてください。私はそう思います。

I am from Fujian, China. There are very few earthquakes in China and even after I came to Japan, I only felt small ones.

On March 11th 2011, earthquake and tsunami occurred in Japan. That was the first experience for me to feel such a big earthquake. At that time, I was having a meeting with my teacher. Suddenly, the earthquake warning alarm started going off in the building, but I thought it was just a test of the alarm, so I did not worry and kept sitting on the chair. After a few seconds, the biggest earthquake happened. I stormed out the building and waited there till the quakes died down.

After several days, I was so scary to see the perspectives

from international media, then I went back to China. Despite the worst situation, Japanese people remained calm and polite. I was deeply impressed by the Japanese people's actions after the earthquake. Japan is my second hometown for me. I felt that it was my responsibility to stand with Japanese people and give efforts for recovering from this situation. My thoughts are always with Japanese people.

Many of tourists from China had to cancel their trip to Japan recently, but I believe Japan and people here will recover soon.

# ふくしまを知り、 世界に発信

Get to know Fukushima,  
and send a message to the world



福島大学経済経営学類 3年

Fukushima university  
Faculty of Economics and Business Administration / Third Year Student

## ダワードルジ アリウンゲレル[モンゴル]

D.Ariungerel

### 大好きな福島 ~震災を経て~

2009年2月、初めて福島の地を踏んだ。成田空港から東京、そして夜間バスでの長時間の移動のすえ明朝の福島に下りたとき、長年の夢であった日本留学への第一歩を踏み出したことに感動していたのをよく覚えている。そして受験にも成功し、2009年4月から本格的な福島ライフが始まった。

入学式が学長などのスピーチや説明だけで終わったこと、1週間もすれば同期のほとんどの友達の髪が明るくなったこと、電車で学校に通うこと、たくさんのカルチャーショックを受け、毎日が不思議でいっぱいあふれていた日々も過ぎてゆき、私の福島ライフはもう3年にさしかかろうとしている。第2のふるさと「福島」から学び、豊かな大自然に癒され、心温かい人々に励まされ、たくさんの思い出を残してくれた。

2011年3月11日、大地震、巨大津波、そして原発事故…誰もが予想だにできなかった大災害が降りかかり日本中の人々の生活は一変



した。止まらない余震、放射能への恐怖…そんな苦難にも屈せず希望への光を求めめるのではなく、どのようにその光をともしのかを考えられ、行動に移せる日本人を私は心からすばらしいと思っている。

私は震災の1週間後、逃げるように国へ帰った。しかし、戻ってきた。なぜならば日本のため、福島のために何かをしたいと考えてからだ。戻ってきてからはがれき撤去、除染、掃除、介護などのボランティアに積極的に

参加し、また小さくはあるが個人のブログなどで福島は安全だとアピールをし続けた。今も、JASPという学生復興応援団体に所属し活動を続けている。

実際にボランティア活動を行うことによって、今回の災害の大きさを目の当たりにし、感じることで、ニュースなどで流れる映像よりもはるかに心に染み渡る何かを感じられたのだ。人人の温かいつながりを感じ取ることができたのだ。大好きな福島をよりいっそう好きになることができたのだ。「福島」の名詞を世界中の人々が今、知るようになった。世界中の関心がある今だけしかできないことがあるのではないだろうか？皆さんも自分自身に問いかけてみてはどうだろうか？これと呼んでいるということは福島と強い関わりを持っているということ、そんな関わりを繋がりへと導き、そこから新しい輪を広げていこうではないか。大好きなこの福島で。

これから福島で新しい人生をはじめようとしているみんなは、とてもすごい。本当にこの決断をするまで大きな道のりがあったと思う。大変な勇気が必要だったと思う。これから毎日が大変かもしれないけど、一緒にがんばっている人が絶対にいるということを忘れないで、辛くて苦しくて逃げ出したいと思ったときでもそれが成長していることだから決して諦めないで。これから絶対に充実した、最高の日々が待っているよ。

この歌をぜひ覚えて。猪苗代ズ、「I Love you, I need you, I want you 福島」



### Love for Fukushima ~ pass an earthquake disaster ~

On February 2009, I first stepped foot in the prefecture of Fukushima. As I got off an overnight bus coming from Narita Airport and arriving in the early morning at Fukushima Station, I still remember vividly how happy I felt that my long-time dream of studying in Japan was finally becoming a reality. From there, I was accepted into Fukushima University, and my life in Fukushima officially began in April, 2009.

At first, every day was full of culture shock and surprises, such as the opening ceremony that only consisted of speeches and general explanations, or how my classmates all changed their hair color within a week of the university commencing, or the simple fact that I had to take a train to get to school. Everyday was full of discoveries, and 3 years quickly sped by as my life in my second home of "Fukushima" taught me many invaluable lessons. Fukushima's beautiful nature and its warm-hearted people have encouraged me over these 3 years to study and live life at its fullest, and have given me many irreplaceable memories.

On March 11th, 2011, unthinkable catastrophes in the form of an earthquake, tsunami, and nuclear accident occurred, and changed the lives of the Japanese people overnight. Amidst the never-ending aftershocks and fear of radiation, what truly inspired me was how the Japanese people didn't succumb to these hardships, and how they didn't seek or rely on hope to come from the outside. Rather, people in Japan chose to think about ways to light their rays of hope on their own, and acted upon these strong intentions.

A week after the earthquake, I went back to my home country and I felt as if I was running away. But I came back, and the reason why I did so was because I felt like I wanted to do something for Japan, and more specifically, do something for Fukushima. After coming back, I actively participated in volunteer activities such as debris removal and cleaning at disaster areas, as well as nursing care for the elderly. I

also started a small personal blog, and tried to spread the message that Fukushima was safe. Even now, I am an active member of a student group called JASP that is associated with revitalizing Fukushima. Through my volunteer work, I have felt and witnessed first-hand the damages caused by the March 11th catastrophes, and have a deep personal connection to the situation that I could have ever gained from just watching the images being shown on TV. This deep connection stems from the feeling of companionship and warmth I felt from others while I was volunteering. I now love Fukushima even more than I loved it before, which means a lot because I loved it very much already.

Now that the noun "Fukushima" is known across the world, I really feel there are many things that can only be done while the whole world still has an interest in Fukushima. I would like to invite everybody reading this to ask themselves what these things may be. If you are reading this, it means you now have an involvement with Fukushima. It would be great if you can take this involvement, and change it into connections with others, and to the creation of new bonds and groups for revitalizing Fukushima.

I have the utmost respect for people who are trying to start their new lives in Fukushima right now. I really feel that a lot of courage was needed, and that there were many barriers to making this decision. There may be some difficult times ahead, but I hope everybody never forgets they are not alone, and that there are many friends who are together with them in this journey. Even if someone may feel like giving up, I hope they always remember that their experiences will only make them stronger, and I hope that they never give up. I am confident there are many happy and fantastic days ahead for Fukushima. Please join me in revitalizing Fukushima, and I hope to make sure you learn Fukushima's new song "I love you, I need you, I want you Fukushima" (Artist Name: Inawashirokos)

# ふくしまを知り、 世界に発信

Get to know Fukushima,  
and send a message to the world



福島大学共生システム理工学研究科博士課程前期 2年

Fukushima University Graduate School  
of Symbiotic Systems Science Second Year Graduate Student

シュ コウ[中国]

Jiu Hao

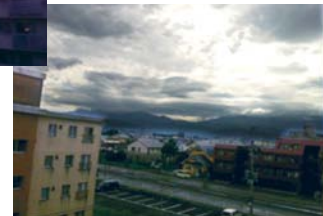
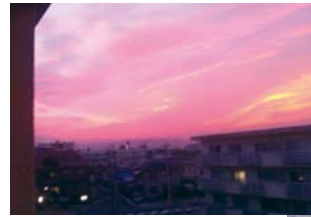
## 福島 頑張れ

そろそろ、2011年はもうすぐ終わりです。今月まで、も日本に3年以上がいたので、いろいろなことが体験しました。楽しかったです。

私は2008年の10月に日本にきました。最初の一年半は東京の日本語学校で勉強しました。さすが国際大都市の東京はとても賑やかなところ。いろんな観光地があります。上野の動物園とか、品川の水族館とか、東京タワーとか、皇居とか。東京にいた時ではまだ日本語がわからないので、よく大笑いのことがありました。八百屋に行った時が人参を買いたかった。しかし、発音が悪いので、人間頂戴と言って、八百屋の人がポーとしていました。東京の一年半は結構楽しかったです。しかし、東京の暮らしは何とか時間に追われているような気がしていました。そのあと日本語学校を卒業したら、福島大学の共生システム理工の研究科に入って、院生の生活が始まりました。

福島に来た前で、よく日本人の友達に福島について聞いたら、知らないとおそこ寒いという答えする人が多かったです。福島に来たら、福島の美しい自然風景に感動されました。結構きれいなところと思いました。澄んだ小川、きれいな空、秋の紅葉、冬の雪山。福島は東京のような大都市じゃなくて、経済はそんなに発達じゃないし、でも私は東京より福島の方が好き

です。特に福島の空が大好きです。下の図は福島でとった夕焼けと雲です。



今年の3月の大地震によって、福島もひどい被害を受けました。でも、民間も政府もいろんな政策を取り組んで、福島を復興するために頑張っています。うち近くの小学校は地震の直後、校庭で遊ぶ子供の姿が見えなくなりました。最近、その学校が校庭の土壌の除染を行っていました。そのあと、また校庭で子供たちの姿を見えました。やっぱり子供たちの笑顔は最高です。

私は福島の復興を信じています。やっぱりみんなの力を合わせて、どんな困難でも乗り越えろと信じている。福島、頑張れ。

## Hang on Fukushima

2011 is coming to an end soon. By the end of this month, I will have now been in Japan for more than three years. I have experienced many things, and enjoyed it very much.

I came to Japan in October 2008. For the first one and a half years, I studied at a language school in Tokyo. Tokyo is an international city without any doubt. There are so many tourist attractions, for example Ueno Zoo, Shinagawa Aquarium, Tokyo Tower, and the Imperial Palace. At the time, my Japanese was terrible. So much so, at times my Japanese would cause hilarious things to happen. One time, I went to a store to buy carrots. In Japanese, the words carrot and human, have a similar sound. However, because of my poor pronunciation, I asked the clerk to give me a human. The sales clerk was shocked, and I was so embarrassed. One and a half years in Tokyo was kind of fun. However, I felt living in Tokyo was sometimes depressing. So after finishing the Japanese school, I went to Fukushima University for my masters degree. It was the beginning of a new life for me.

Before coming to Fukushima, I asked some Japanese friends about Fukushima, and their answers were always like

"I don't know that place" or "it's very cold in winter". When I came to Fukushima, I was impressed by its beautiful natural scenery. I found it quite beautiful, and full of clear streams, beautiful skies, red maple leaves, and snowy mountains in winter. Fukushima was not like Tokyo because its in the countryside. But I like Fukushima better than Tokyo. In Fukushima, I especially love the sky. It's so beautiful. The pictures below were taken in Fukushima.

The earthquake in March this year caused heavy damage in Fukushima. But ordinary citizens in Fukushima and the government are working hard to make people's lives get back to normal. After the earthquake, I could not see any children playing outside at the elementary school near my apartment. Recently, the school has taken measures to reduce the radiation levels at the playground. Now, I see students playing outside again. I just want to say the children's smiles are the best things in the world.

I believe life in Fukushima will get back to normal again. No matter how many difficulties we face, we will hang on to see a beautiful future. So hang on, Fukushima.

ふくしまを知り、世界に発信2011 in 会津若松



参加者アンケートから

「ふくしまを知り、世界に発信2011 in 会津若松」では、参加した学生を対象としたアンケートを実施し、さまざまな意見が寄せられました。ここでは、その中の一部をご紹介します。

今回のディスカッションに参加できて本当によかったです。東日本大震災によっていろいろな意見を述べてきてよかったです。もっと参加者とコミュニケーションができればいいと思います。

東日本国際大学 4年生/ミャンマー出身

いろいろな国の人と話することによって、新しい発見もできたり、新しい友達もできたので、とてもたのしかったです。次回のイベントにも参加したいと思います。

福島大学 2年生/マレーシア出身

It was good opportunity to meet other students and exchange thoughts, opportunity to learn and talk about Aizu history.

会津大学 博士課程/エルサルバドル出身



パネルディスカッションで外国の方の日本に対する思いや意見を聞くことができて、とても新鮮で刺激的でした。

福島大学 2年生/日本人学生



この事業で国際交流はできると思います。この事業によって、日本のことは全世界にも伝わるはずですよ。

東日本国際大学 3年生/中国出身

いろいろな国から来た留学生の体験談を話す機会に参加できてとてもよかったです。留学生として自らできることをやって、ぜひ「福島は元気です」ということを世界にアナウンスしたいです。

会津大学 2年生/中国出身



留学して、何を見て、何を学んだか?

日本から  
海外へ

日本大学工学 研究科博士前期課程 2年  
機械工学専攻 創成学研究室

安部田 泰

## サウスハンプトン大学に学んで

昨年度、私は平成22年度日本大学大学院海外派遣留学生として、イギリスの南西に位置するサウスハンプトン大学に留学しました。私が留学をするきっかけは、日本で所属している研究室の先生方の留学経験のお話をお聞きしたり、日本への留学生と共に過ごしたりしたことです。

まず一言。皆さんも海外へ飛び出して見て下さい。百聞は一見にしかず。まず自分自身で挑戦することが大事だと留学後、私は痛感しております。

では、イギリスでの研究生活と私生活について、簡単に紹介させていただきます。

所属先の研究室は、留学生が多く、彼らから自身の考えをはっきり述べ、相手の意見に対して積極的に質問する大切さを学びました。週に1度、先生方や学生達と研究の意見交換が行われる場が設けられており、ディスカッションを行う機会が多い研究室でした。

私生活においては、大学のジムで出会った友人と趣味のバスケットでリフレッシュしたり、新たな友達の輪を広げていました。また、友人たちとスコットランドへ旅行に出かけ、キルトというスカートのような民族衣装をはいた男性演奏者と出会ったり、お城を見学することで、その地域の雰囲気を楽しみました。移動中は、友人たちと互いの食文化や流行についての会話に花が咲きました。

イギリスでの留学は、楽しいことばかりではありませんでした。ビザの申請のため、研究室の秘書の方をはじめ、大学のスタッフの方々に助けていただきながら、書類を作成した際は大変でした。それらは、苦勞した分、一生の思い出になりました。留学は、異文化に触れ、物事に対する自身の消極性を改める機会であったり、異国の友人と出会い、その国の文化や考え方(例えば、挨拶の意味など)を知る場でもあったり、自身の人生にすばらしい1ページを加えてくれるのです。皆さんもぜひチャレンジしてみたいかがでしょうか。



▲秘書のSueさんと研究室前にて



▲スコットランド旅行にて



▲友人とクラブにて



▲エディンバラ城前にて

日本から  
海外へ

福島大学  
行政政策学類 2年  
今井 智奈海

## ルーマニアでの思い出

私はこの研修旅行に参加するまで、ルーマニアという国がどのような国なのか、日本とどのような関わりがあるのかよくわかっていませんでした。生まれて初めての10時間以上のフライトを経験し、美しい黒海を目にした、海洋博物館、考古学博物館、民俗博物館を巡ったり、世界遺産のお城や国民の館を見学させていただいたり日本では絶対に見ることのできない景色をたくさん目に焼き付けてきました。街の中も日本とは全く違う建物の造りで、看板、信号、自動販売機など見るもの全てが新鮮でした。政府の方や大使館の方がいらっしゃるディナーももちろん初めてで、たくさんの方から温かい言葉をかけていただいたことは一生忘れない素晴らしい体験です。中でもルーマニアで過ごした2週間で、1番心に残っているのは日本語を学んでいる学生と交流したことです。

私は彼女達と会う前は、福島のこと、地震のこと、原子力発電所のことについて聞かれるのではないかと考えていましたが、実際は違い、日本で流行っていることや文化について、特に日本語について興味をもっているようでした。何かを教えるというよりは私達がルーマニアについて教えてもらったことの方が多かったです。私達は無意識のうちに日本は小さくて世界から見てそれほど影響力のない国だと思いがちですが、ルーマニアの人はすごく日本に親しみを持っていて、今回の震災のときも共に痛みを感じてくれていたということを知り、胸が熱くなりました。この出会いを大事にして、ルーマニアと日本の距離がもっと近くなるようにこれからも交流を深めていきたいです。私ができる恩返しはこの体験を自分達だけのものにせず、たくさんの人に伝えることだと思っています。余談ですが私は日本で換金できない200レイを財布の中に忘れたまま帰国してしまったので、いつかまたルーマニアを訪れて、その時に使おうと思います。この研修旅行でお世話になった全ての方に心から感謝しています。このような素晴らしい機会を与えてくださり、本当にありがとうございました。



▲ブルクレスト大学の学生たちと

日本から  
海外へ

福島大学  
経済経営学類 2年  
佐藤 潤

## University Of Seoul Summer Program II 2011 ～情熱の韓国に触れて～

2011年の夏「ソウル市立大学サマープログラム」に参加した。このプログラムは、ソウル市立大学と協定を結んでいる全国の大学から学生が参加し、約2週間に渡って韓国の大学生と一緒に生活をする企画である。朝鮮の文化について学ぶ授業の中でこのプログラムが紹介され、夏休みを普通に送るのとほとんど変わらない値段で韓国へ行けることに驚き、参加を決めた。入り口は、そんな些細な気持ちからだった。

サマープログラムでは、毎週の学外活動、毎日の学習、毎晩の懇親会、これまでの人生の中で最もと言っても過言ではない程の有意義な時間を過ごすことができた。韓国に到着した晩、早くも1日目には寄宿舎のリビングで日韓間における微妙な問題について夜が更けるまで語り合った。自分の意見を述べるだけでなく、相手の立場を理解して話を聞く。自分と同じ身分でありながら、異なる文化の中で、異なる教育を受けて、異なる空間の中で生きてきた韓国の大学生。異文化を理解することの難しさを実感した。

韓国のさまざまな伝統文化、ポップカルチャー、異文化の食事を口にし、見て、聞いて、触り、味わい、臭いをかいだ18日間だった。ソウルの風を感じ韓国を隅々まで見て、辛い思いをしながら舌で楽しんだ。明るい希望に満ちた未来について語り合い、世界を感じた。別れの朝バディから『韓国に来てくれてありがとう』と日本語で書かれた1枚の葉書を受け取った。もし自分が逆の立場だったら『日本に来てくれてありがとう』と、ストレートにその国の人の言葉で言っておあげられるだろうか。

韓国は日本から2時間程度で行くことのできるとても近い海外だ。しかし韓国の習慣は日本と異なる面も多い。両国が複雑な歴史的経緯を抱えながらも、同じ大学生として寝起きを共にし、腹を割って話せた経験は、生涯忘れることのできない思い出になっただろう。ひと夏の体験がアジアに興味を抱ききっかけとなった。帰国後は国内でまだ行ったことのない場所へ週末の度に出掛けるようになり、まず日本のことを知ろうと思うようになった。そして今後は、アジア人としてアジアのことをもっと勉強したいと思っている。



▲サマープログラム歓迎会にて



▲金浦国際空港にて別れの時

日本から  
海外へ

会津大学  
博士前期課程 1年  
山本 脩太

## ローズハルマン工科大学研修 現地報告

私は会津大学と提携を結んでいるローズハルマン工科大学に8月の終わりから3ヶ月間交換留学をさせていただいています。こちらは9月の時点で既に寒く、最低気温はまもなく氷点下になりそうです。

現在、「Artificial Intelligence」と「Design & Analysis of Algorithms」の2つのクラスを履修しています。それぞれの授業が週に4回ずつあり、次の授業までの準備を1日で行わなければならないことも多いです。課題も内容を理解した上で自分なりに深く考えないと解けないものが多く、毎回時間をかけて取り組んでいます。課題の中にはグループで行うプロジェクトワークもあり、空いている時間に集まって話し合いながら行わなければなりません。これらの授業とは別に日本語の授業にも参加させていただき、授業のサポートをさせていただいています。今回、寮の定員がいっぱいだったので、オフキャンパスのアパートに1人で住むことになりました。ルームメイトがいないので、同じアパートの友達と話す機会をなるべく多く持つようにしています。

授業以外では日本アニメのクラブとパルクールというスポーツの活動に参加しています。アニメクラブには友人に誘っていただいて参加しているのですが、みんな自分以上に日本のアニメに詳しい方ばかりです。パルクールへはキャンパス内の広場で活動しているところへ飛び込みで参加させていただいたのがきっかけです。日本ではマイナーなスポーツですが、ここでは数十人が活動しています。あまり派手な技はできませんが楽しみながら運動しています。9月にちょうど大学のホームカミングがあり、そのなかでいくつかイベントがあったのですが、とくにbonfireという大きな焚き火が印象的でした。点火方法も豪快でしたが、少し離れたところから見ても長くはその場にいけないほどの熱気に圧倒されました。

渡米の際に飛行機が遅れ、乗り継ぎに間に合わずデトロイトのホテルで一泊するというハプニングがありました。今では良い経験です。帰国までなるべくたくさんの経験をして、視野を拡げたいです。



海外から  
日本へ

日本大学工学部  
土木工学科 1年  
シム テック チン [マレーシア]

## 寒いけど……

朝六時頃、夢うつつのまま、まだ鳴っていない目覚ましをいつもの習慣で無意識のうちに止めようとした。強い意識で、温かな掛け布団から離れ、カーテンにさえぎられた窓明かりもないところまで、だるい足をゆっくり引きながら歩く。大きな窓の辺に座り、寒夜の風雨から生き抜いた彼岸花の下露をばんやりと眺め続けた。今朝の秋は寒い。

高校の記念文集が手の周りの本棚にある。“最後のリーグ、最後のタイム”と緒言に気軽に目を通す。何回も読んだので、次の言葉がすぐに思い浮かぶ。その時、ふと、「リーン」と長く鳴り続けるベルの音が脳中で聞こえた。高校の喧々囂々の光景も浮かんだ。この音に関する全ての思い出が一瞬に頭に流れ込んで、最後の幕が落ちる瞬間に、両頬が彼岸花の色の染まり、心の下露で痕を深く刻みました。次の瞬間、痕は秋の風に風化され、とたんに消えてなくなった。日本の秋は寒い。

幕が再び開いたのは、二年後。この二年間は幻のように駆け過ぎていった。本当に幻なのか。いや、そんなことはない。この二年間の出来事、新たな環境でできた友、すべての事が記憶に蘇ります。想いを後に向けて、高校を出て、生まればかりの子牛のように日本にきた頃の姿、日本語学校の入学式で隣に座っていた友の顔、日本語がまだ喋れない頃、ドアのノック音や携帯の呼び出し音になるたびにビクビクしていた気持ち、色々なことが、私がこの二年間に存在した証である。

四季のある国で暮らして、時間の勢いを感じた。寒さを感じながら。





海外から  
日本へ

会津大学  
グレゴリー トービル [アメリカ]

## 楽しかった日本

私は5月4日に日本に来て、11月6日にアメリカへ帰りました。日本にいた6か月間、私は会津大学の授業や、研究室でのコンピュータサイエンスの研究、地元の学校での交流活動、ロックバンドの練習や発表そして日本国内の旅行などで、忙しく過ごしていました。

新学期は、私が大学に到着してすぐに始まりました。私は、大学院のいくつかの授業に参加しました。母校である、ローズハルマン工科大学にはない授業もあったので、とてもいい経験になりました。また、研究室で他の学生と一緒に活動することも、とても勉強になりました。私はこれまで、語学研究の分野について学んだことはありませんでしたが、約1年前から日本語を勉強し始めて以来、コンピュータサイエンスがどう語学習得を助けることができるかに興味を持っていました。

大学での勉強以外でも、様々な活動に参加しました。初めて参加したボランティア活動は、環境問題について考えるための、小学生とのケナフ栽培でした。ケナフからは紙を作ることができます。数か月かけて、種まきから刈取りまでを行いました。子供たちと会って、話すのは本当に楽しかったです。畑にいる虫や植物、動物からお互いに日本語と英語を学び合いました。

また、地元の小学校5,6年生の英語の授業にも参加しました。子供たちがこれまでに習った英語を使って話してくれたり、私のアメリカでの生活を紹介したりして、楽しい時間を過ごすことができました。

他にも、飯坂町でのけんか祭りでは県内にいる他の留学生や先生がたと神輿を担ぎました。大声を出しながら町を練り歩き、それを家族が見守る姿を見て、自分が日本の文化に触れていると実感することができました。

この他にも、日本人の学生とドラムを演奏したり、夏にはアメリカから友達に来て、一緒に日本を旅したりしました。

私は、日本への留学を通して、とても有意義な時間を過ごすことができました。そして、日本でできた友達に会いに、また日本に戻ってきたいです。私は、たくさんの日本文化や日本語について学ぶことができました。また日本に戻ってくるまで、もっと勉強しておきます。看板や、友人の名前、行った場所の名前から、今は依然より漢字を覚えることが簡単になりました。アメリカに帰らなければならないのは悲しいですが、半年間、日本で学ぶという、素晴らしい機会を与えてくださったことに感謝します。



海外から  
日本へ

会津大学  
ダリア バジエニナ [ロシア]

## 日本での生活

私は、会津若松で10年以上、家族と一緒に生活しています。私は、この街が大好きです。会津は、たくさんの植物や花、新鮮な空気、とても美しい自然に恵まれています。私は、シベリアのように季節をはっきりと感ずることができ、シベリアほど極寒地ではない、雪の降る会津が気に入っています。会津には保養施設が多く、冬にクロスカントリー・スキーを楽しみ、夏に猪苗代湖畔で休暇を過ごせることも気に入っています。

会津若松は、ノヴォシビルスクと同じく学術の街です。大学が一つしかありませんが、独自の存在として日本中に知られています。春になると、大学の周りには美しい桜が咲き、毎年、友人たちと花見を楽しんでいます。会津にいて飽きるということがありません。会津は、まさに歴史の中心であり、美しい鶴ヶ城を始め、歴史的建物が多く、誰も無関心ではいられないでしょう。市内では様々な祭りがあり、いつも喜んで参加します。

日本では華やかな花火が楽しめます。会津の塩川で初めて見ました。ノヴォシビルスクでも6月の建都記念日に花火が打ち上げられますが、華やかさに欠けます。会津で見る夏の水田の風景は、とても美しいです。シベリアでは稲作ができないので、会津で初めて米の栽培と収穫を見ることができました。1月には、家族の好例行事である十日市に出かけ、贈り物に漆塗りの小箱を買います。友人たちの多くは、来日の際に会津に来ることを楽しみにしています。私たちも、いつも家族で客をもてなし、特別な興味深いものを見せるのが楽しみです。



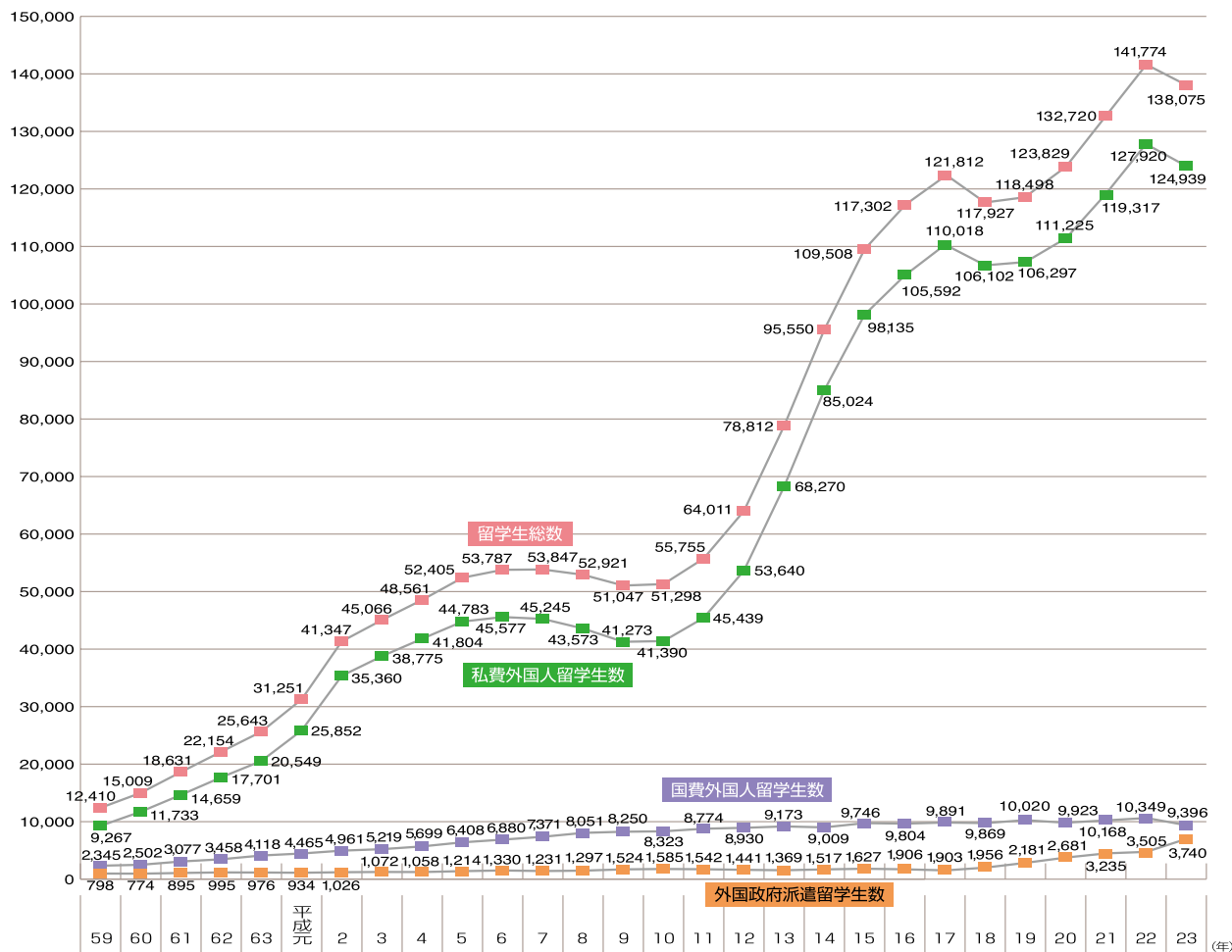
▲右から2人目がダリアさん

# 外国人留学生の受け入れ状況

我が国の大学等で学ぶ留学生は、平成23年5月1日現在138,075人で、平成22年度に比べ3,699人(2.6%)減少した。これを出身地域別に見ると、我が国の地理的、文化的状況もあり、アジア地域からの留学生が全体の約9割を占めている。

また、出身地域では、中国、韓国及び台湾からの学生が全体の78.8%を占めている。

## 留学生数の推移 大学・専門学校等の在籍者数(各年5月1日現在)



(文部科学省及び(独)日本学生支援機構調べ)

## 出身国・地域別 留学生数

※大学・専門学校等の在籍者に限る  
(平成23年5月1日現在)

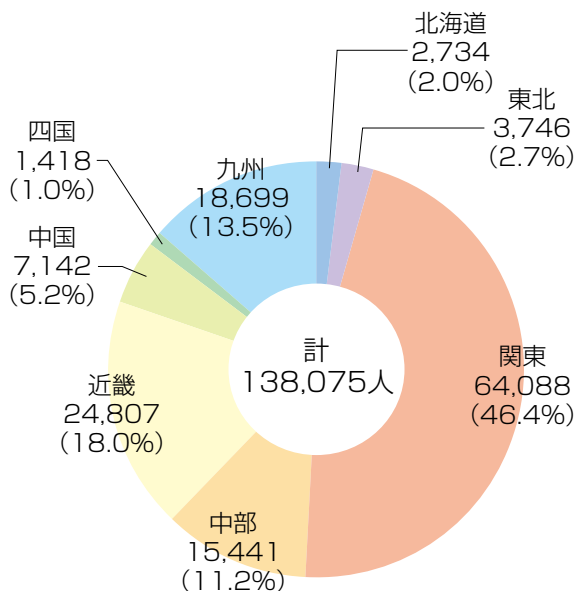
国・地域名	留学生数(人)	構成比
中国	87,533	63.4%
韓国	17,640	12.8%
台湾	4,571	3.3%
ベトナム	4,033	2.9%
マレーシア	2,417	1.8%
タイ	2,396	1.7%
インドネシア	2,162	1.6%
ネパール	2,016	1.5%
アメリカ	1,456	1.1%
バングラデシュ	1,322	1.0%
その他	12,529	9.0%
<b>合計</b>	<b>138,075</b>	<b>100.0%</b>

(文部科学省及び(独)日本学生支援機構調べ)

# 地方別・都道府県別留学生数

※大学・専門学校等の在籍者に限る(平成23年5月1日現在)

北海道	2,734
青森	413
岩手	375
宮城	2,018
秋田	292
山形	207
福島	441
茨城	2,713
栃木	1,073
群馬	1,571
埼玉	6,013
千葉	4,850
東京	43,188
神奈川	4,680
新潟	1,592
富山	571
石川	1,670
福井	309
山梨	880
長野	681
岐阜	1,353
静岡	1,679
愛知	6,706



注) 他府県にまたがる大学等の留学生については、本部の所在する都道府県に計上した。

三重	1,025
滋賀	470
京都	6,246
大阪	10,325
兵庫	4,959
奈良	1,490
和歌山	292
鳥取	183
島根	230
岡山	2,516
広島	2,647
山口	1,566
徳島	350
香川	378
愛媛	507
高知	183
福岡	10,635
佐賀	341
長崎	1,518
熊本	667
大分	3,873
宮崎	167
鹿児島	881
沖縄	617

(文部科学省及び(独)日本学生支援機構調べ)



## 福島県内高等教育機関における外国人留学生の受け入れ状況

### 国費・私費別外国人留学生数

(平成22年10月1日現在)

区分	留学生の所属大学等																計	%			
	福島県立医科大学	会大	津学	会津大学短期学	奥大	羽学	日大工学部	郡女大	山子学	郡山女子大学短期大学部	いわき明星大	東日本国際大	いわき短大	福学大	島院学	福島学院大学短期大学部			桜の聖母短期大学	福島工業高等専門学校	福大
国費	1	16					1											4	6	28	5.7
政府派遣							4											9	1	14	2.9
県費				1													1			2	0.4
私費	2	48				10	1		5	210									170	446	91.0
計	3	64		1	0	15	1	0	5	210	0	0	0	0	0	0	1	13	177	490	100.0

(平成23年10月1日現在)

区分	留学生の所属大学等																計	%			
	福島県立医科大学	会大	津学	会津大学短期学	奥大	羽学	日大工学部	郡女大	山子学	郡山女子大学短期大学部	いわき明星大	東日本国際大	いわき短大	福学大	島院学	福島学院大学短期大学部			桜の聖母短期大学	福島工業高等専門学校	福大
国費		6																1	5	12	3.1
政府派遣			5				4													9	2.3
県費																				0	0.0
私費	2	47				20			4	161									138	372	94.7
計	2	58		0	0	24	0	0	4	161	0	0	0	0	0	0	0	1	143	393	100.0

※留学生受け入れがない大学は、計上していません。

# 国・地域別外国人留学生数 (平成23年10月1日現在)

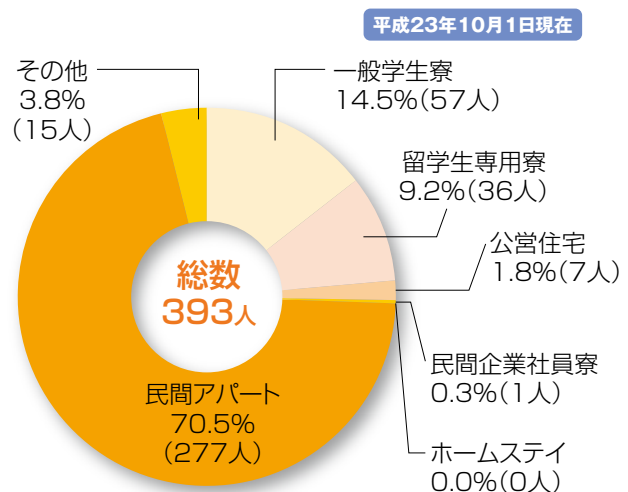
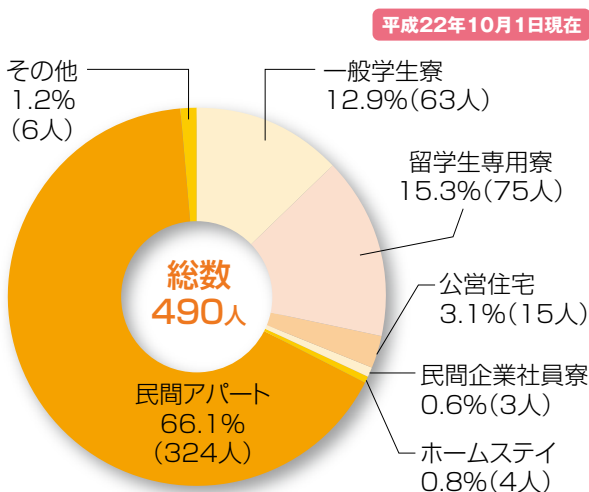
地域・国別		所属大学等		医福 科島 大県 学立	会 津 大 学	工日 本 大 学 大 部 学	大い わ き 明 学 星	大東 日本 国 際 学 校	専福 門島 学工 校業 高 等	福 島 大 学	計	地 域 別 割 合
		所属大学等	所属大学等									
アジア	中 国		2	18	13	3	88			109	233	97.5%
	台 湾			13			1			1	15	
	韓 国			1		1	23			12	37	
	ネ パ ー ル						19			1	20	
	モ ン ゴ ル				2		3			6	11	
	マ レ ー シ ア				4					3	7	
	イ ン ド ネ シ ア									1	1	
	ミ ャ ン マ ー							24			24	
	ベ ト ナ ム			5			1			9	15	
	ラ オ ス								1		1	
	タ イ			1	4						5	
	フ ィ リ ピ ン									1	1	
	ス リ ラ ン カ			9							9	
	イ ン ド			3							3	
バ ン グ ラ デ ィ ッ シ ュ			1							1		
計		2	51	23	4	159	1	143	383			
北米 中南米	ブ ラ ジ ル						1				1	1.0%
	ペ ル ー											
	エ ル サ ル バ ド ル			1							1	
	コ ロ ン ビ ア											
	ア メ リ カ			1	1						2	
計		0	2	1	0	1	0	0	0	4		
オセア ニア	オ ー ス ト ラ リ ア						1				1	0.3%
	計		0	0	0	0	1	0	0	1		
ヨー ロッパ	ド イ ツ											0.8%
	ブ ル ガ リ ア			1							1	
	ハンガリー											
	ロ シ ア			2							2	
計		0	3	0	0	0	0	0	0	3		
アフリ カ	ナ イ ジ エ リ ア											0.5%
	ウ ガ ン ダ											
	チュニジア			2							2	
	コンゴ民主共和国											
	タンザニア											
計		0	2	0	0	0	0	0	0	2		
合 計			2	58	24	4	161	1	143	393	100%	

# 私費留学生の奨学金別受給状況 (平成23年10月1日現在)

奨学金名称	国・地域	人数	機関名
私費外国人 学習奨励費	大学院	4	会津大学
	大学院	5	福島大学
	学部	10	福島大学
	学部	1	日本大学
	学部	11	東日本国際大学
	別科	2	東日本国際大学
	計	33	
(財)ロータリー 米山記念奨学金	学部大学院	2	日本大学
	大学院	4	会津大学
	大学院	2	福島大学
	大学院	1	福島医科大学
	学部	2	東日本国際大学
	学部	2	福島大学
	計	13	
ふくしま 友好外交官	大学院	3	福島大学
	学部	2	東日本国際大学
	学部	3	福島大学
	計	8	
(財)平和中島 財団外国人 留学生奨学金	大学院	1	福島医科大学
	大学院	1	会津大学
	学部	1	福島大学
	計	3	

奨学金名称	国・地域	人数	機関名
彌満和奨学金	大学院	1	福島大学
	学部	4	福島大学
	計	5	
日本大学工学部 第三種奨学金	大学院	4	日本大学
	学部	3	日本大学
	計	7	
会津大学 留学生後援会	大学院	2	会津大学
	学部	1	会津大学
	計	3	
小林奨学金	大学院	1	福島大学
	学部	1	福島大学
	計	2	
サト一国際奨学金	大学院	1	福島大学
(財)実吉奨学金	学部	1	日本大学
安田奨学金	学部	3	福島大学
マブチ国際育英財団	学部	3	福島大学
デュアルディグリー プログラム奨学金	大学院	1	会津大学
短期留学生推進制度 による奨学金	大学院	2	会津大学
金子国際文化交流 財団奨学金	学部	1	東日本国際大学
東日本国際大学 内奨学金	学部	2	東日本国際大学
日本国際教育 支援協会奨学金	学部	1	福島大学
ヒロセ奨学金	学部	1	福島大学
総計		90	

## 留学生の寄宿状況



平成23年度 福島県内高等教育機関における研究・教育交流協定締結校名 (平成23年10月1日現在)

大学名	交流協定締結校	国名	所在地	学術交流協定締結	学生交流協定締結	留学生受け入れ数	学生派遣数	地域
会津大学	インド工科大学デリー	インド	ニューデリー	○	○			1
	コンジュ国立大学	韓国	忠清南道公州市	○	○			1
	ソウル市立大学	韓国	ソウル市	○	○			1
	ハリム大学	韓国	江原道春川市	○	○			1
	浦項工科大学X線画像センター	韓国	慶尚北道浦項市	○	○			1
	延世大学バイオメトリクス工学研究所	韓国	ソウル市	○	○			1
	釜山国立大学	韓国	釜山広域市	○	○			1
	高麗大学	韓国	ソウル特別市	○	○			1
	忠北大学校	韓国	忠清北道清州市	○	○	1		1
	APEC気候センター	韓国	釜山市	○				1
	国立暨南国際大学	台湾	南投県埔里鎮	○	○			1
	淡江大学	台湾	台北県	○	○			1
	朝陽科技大学	台湾	台中県霧峰郷	○	○	10		1
	国立中央大学大学院天文研究所	台湾	桃園県中壢市	○				1
	ハルビン工業大学	中国	黒龍江省	○	○	1		1
	華中科技大学	中国	河北省武漢市	○	○	2		1
	上海交通大學	中国	上海市	○	○			1
	上海大学	中国	上海市	○	○			1
	中国科学院近代物理研究所	中国	甘肅省蘭州市	○	○			1
	南京大学	中国	南京市	○	○			1
	復旦大学	中国	上海市	○	○	1		1
	北京大学軟件微電子学院	中国	北京市	○	○			1
	北京大学核物理総合研究センター	中国	北京	○	○			1
	大連東軟信息学院	中国	大連	○	○			1
	F P T 大学	ベトナム	ハノイ市	○	○			1
	ハノイ工科大学 (HUT)	ベトナム	ハノイ市	○	○	5		1
	ベトナム国際界国語大学	ベトナム	ハノイ市	○	○			1
	郵政電信工藝学院	ベトナム	ハノイ市	○	○			1
	ウエストバージニア大学	米国	ウエストバージニア州 モーガンタウン	○	○			2
	サウスカロライナ大学	米国	サウスカロライナ州 コロンビビア	○	○			2
	テイラー大学	米国	インディアナ州 アップランド	○	○			2
	マーサー大学	米国	ジョージア州 メーヨー	○	○			2
	ローズハルマン工科大学	米国	インディアナ州 インレホー	○	○	1	1	2
	ワイカト大学	ニュージーランド	ワイカト	○	○		1	4
	ボルト大学	ボルトガル	ボルトガル	○	○			5
	ローマ大学サピエンツァ	イタリア	ローマ	○	○			5
	ウメオ大学	スウェーデン	ウメオ	○	○			5
	デュッセルドルフ 専門大学 (FH-D)	ドイツ	デュッセルドルフ	○	○			5
	ミュンヘン工科大学	ドイツ	ミュンヘン	○	○			5
	ロレーン工科大学	フランス	ムルト＝エ＝モゼル レン	○	○			5
	国立応用科学院レンヌ校	フランス	レンヌ	○	○			5
	グダニスク工科大学	ポーランド	グダニスク	○	○			5
	ポーランド日本情報工科大学	ポーランド	ワルシャワ	○	○			5
	ティミソアラ工科大学	ルーマニア	ティミソアラ	○	○			5
	東フィンランド大学	フィンランド	ヨエンスウ	○	○			5
	サンクトペテルブルク工科大学	ロシア	サンクトペテルブルク	○	○			5
	サンクトペテルブルク 情報技術・機械・光学大学	ロシア	サンクトペテルブルク	○	○			5
	サンクトペテルブルク電氣工科大学	ロシア	サンクトペテルブルク	○	○			5
	サンクトペテルブルク大学	ロシア	サンクトペテルブルク	○	○			5
	ノボシビルスク国立工科大学	ロシア	ノボシビルスク	○	○			5

大学名	交流協定締結校	国名	所在地	学術交流協定締結	学生交流協定締結	留学生受け入れ数	学生派遣数	地域	
会津大学	ノボシビルスク国立大学	ロシア	ノボシビルスク	○	○			5	
	モスクワ工科大学	ロシア	モスクワ	○	○			5	
	モスクワ物理工科大学	ロシア	モスクワ	○	○			5	
奥羽大学	慶熙大学	韓国	ソウル市	○	○			1	
	ロマリンダ大学	アメリカ	カリフォルニア	○				2	
日本大学工学部	テキサス大学オースチン校工学部	アメリカ	テキサス	○	○			2	
	ルーヴァン・カトリック大学工学部	ベルギー	ルーヴァン・ラ・ヌーヴ	○	○			5	
	ウメヲ大学理工学部	スウェーデン	ウメヲ	○	○			5	
東日本国際大学	和春技術学院	台湾	高雄県	○	○			1	
	金浦大学	韓国	京畿道	○	○			1	
	世宗大学	韓国	江原道	○	○			1	
	成均館大学	韓国	ソウル	○	○			1	
	開南大学	台湾	桃園県	○	○			1	
	安徽大学	中国	安徽省合肥市	○	○			1	
	曲阜師範学校	中国	山東省曲阜市	○	○			1	
	曲阜師範大学	中国	山東省曲阜市	○	○			1	
	孔教學院	中国	香港九龍	○	○			1	
	中国政法大学	中国	北京	○	○			1	
	大連民族学院	中国	遼寧省大連市	○	○			1	
	撫順師範高等専科学校	中国	遼寧省撫順市	○	○			1	
	瀋陽体育学院	中国	遼寧省瀋陽市	○	○			1	
	牡丹江大学	中国	黒竜江省牡丹江市	○	○			1	
	山東大学	中国	山東省済南市	○	○			1	
	ファースト・グローバル・コミュニケーション・カレッジ	タイ	ノンカイ	○	○			1	
	カリフォルニア州立大学	アメリカ	カリフォルニア州	○	○			2	
	ハワイ州立大学	アメリカ	ハワイ	○	○			2	
	福島大学	北京師範大学	中国	北京	○				1
		韓国外国語大学	韓国	ソウル市	○	○		1	1
白石大学・白石文化大学		韓国	天安市	○	○			1	
国立台北大学		台湾	台北市	○				1	
河北大学		中国	保定市	○	○		1	1	
華東師範大学		中国	上海市	○	○			1	
中南財経政法大学		中国	教育省	○				1	
ハノイ自然科学大学		ベトナム	ハノイ市	○				1	
ハノイ人文社会科学大学		ベトナム	ハノイ市	○	○			1	
ウイスコンシン大学		アメリカ合衆国	オークレア市	○				2	
ミドルテネシー州立大学		アメリカ合衆国	マーフリースボロー	○				2	
ビクトリア大学		カナダ	ビクトリア市	○	○			2	
クィーンズランド大学		オーストラリア	ブリスベン	○	○			4	
スターリング大学		スコットランド	スターリング	○	○			5	
ウィンチェスター大学		英国	ウィンチェスター		○			5	
ルール大学ボーフム		ドイツ	ボーフム	○	○		2	5	
ソウル市立大学		韓国	ソウル	○	○			1	
西南交通大学	中国	四川省成都市	○	○			1		
福島工業高等専門学校	Thammasat University	タイ	バンコク	○	○			1	
	Middlesex University	英国	ロンドン	○	○			5	
いわき明星大学	遼寧石油工科大学	中国	遼寧省撫順市	○	○			1	
	瀋陽薬科大学	中国	遼寧省瀋陽市	○	○	3		1	
福島県立医科大学	武漢大学	中国	湖北省武漢市	○	○			1	

## アカデミア・コンソーシアムふくしま

事務局:福島大学大学連携センター

住 所:〒960-1296 福島市金谷川1番地

電 話:024-548-5295 FAX:024-548-5296

発 行:平成24年3月